兵庫県宍粟市中坪集落を事例とした「天役」の変遷に関する研究

Transition of “Tenyaku” that is Joint Control in Nakatsubo, Hyogo

福井 美帆* 上甫木昭春**

Miho FUKUI Akiharu KAMIHOGI

Abstract : In this research, the focus was appropriated to “Tenyaku” that was the joint control in the environment of village done for a long time in Nakatsubo, Hyogo. The transition of Tenyaku work and knowledge of engaging people about the work was investigated. The work of Tenyaku was classified into environmental maintenance and “Furusatomura” activity (the exchange with the city resident that had started in 2003) and the afforestation. As a result, the afforestation and environmental maintenance were done chiefly in 1955, and the afforestation was numerous with 95.5% of the entire Tenyaku in 1965. In 1993’s, the frequency of Tenyaku decreased and the afforestation was done mainly. After 2004, the afforestation was decreases to 23.9%, and “Furusatomura” activity was just about the same. And the purpose to participate in Tenyaku of engaging people had changed from “To live in the village” in old times (In about the 1965) to “To maintain communication in the village” now (After 2004). It is thought that the change in the work of Tenyaku and the change in consideration to Tenyaku take place changing in the social background that surrounds the village such as increase and decrease and depopulation and change in the wood demand.

Keywords: Local community, joint control, awareness of resident, exchange, afforestation

キーワード: 集落組織, 共同管理, 居住者意識, 交流, 造林

1. はじめに

日本の農村環境は昭和 30 年代以降, 燃料革命や産業構造の転換, 農業における化学肥料の導入や機械化といった社会的変化を背景に地域住民による資源利用の仕組みが変化し, 農村環境を維持する伝統的な仕組みも崩壊してきた¹⁾。

人間の管理によって維持されてきた農村環境の保全においては, 従来の集落共同管理活動による伝統的な環境保持の仕組みを今日的にどのように再編成するかが問題である²⁾。そのためには, 従来の農村環境の空間構造, それを支えてきた伝統的なシステムの特徴を明らかにし, 新たな仕組みを再構築する必要があるといえる。

これまで, 伝統的な農村環境の空間構造については, 明治後期の迅速測図に基づいて伝統的な土地利用を復元した研究³⁾や, 文献や絵図, 航空写真など多様なアプローチを用いて歴史的変遷を明らかにした研究^{4), 5)}がなされてきた。また, 伝統的な地域住民の資源利用システムの研究として, 明治時代の日記を用いて農村空間での地域住民による山林資源利用のシステムと空間形成との関係を明らかにした研究⁶⁾や, それをさらに時間軸的な観点から発展的に分析した研究⁷⁾がある。このように, かつての農村空間の構造と, そこに住む住民の資源利用との関係や, それらの変遷に関してはこれまでも研究がなされてきた。しかし, 農村空間の形成に至るまでの背景には個人の資源利用だけではなく, 集落単位での環境維持管理作業が存在していた。小池ら⁸⁾は集落内環境の維持管理作業の一つである農業水路の維持管理作業に着目し, 宮城県内の 2 集落を対象としてその維持管理実態と住民参加拡大の可能性を明らかにした。また, 環境とその管理作業との関係については, 上原ら⁹⁾が里山林の公益的機能を発揮させるため, 主として環境特性から管理作業のあり方を論じた研究がある。しかしこれまで, 集落全体において, 現在に至るまでの共同管理活動の変遷やそれらと環境との関係について詳細に調査された研究や, また, それらを踏まえた共同管理活動の発展的なあり方について

論じた研究はあまりない。そこで本研究では, 集落共同管理活動の一事例として, 古くから兵庫県山間部で行われている集落共同管理活動である「天役」に着目し, その変遷を追うことで, 今後の集落共同管理活動のあり方について考察することを目的とした。なお, 本研究における「天役」とは, “地域の共同山及びその他集落環境の維持管理に関する労役”のことを指す。また, この地域の「天役」が, 一般的な集落共同管理活動¹⁰⁾と異なる点は, 「共同山」における経済的利益を目的とした森林施業や, 現在集落で行われている集落活性化活動でも行われている点である。この地域の「天役」は, 時代と共にその対象とする環境や, 活動目的が変化してきていると言える。

また, ここでいう「共同山」とは, 昭和 30 年代には町から集落が借り受け, 縁故使用地として縁故使用民^{注1)}が利用, 管理していた山林である。そしてそれら山林は, 昭和 46 年に中坪を含む周辺 4 集落で組織された東河内生産森林組合が町から払い下げを受けて以降, 東河内生産森林組合によって管理されてきた。本論では, 主として中坪集落が東河内生産森林組合より借り受けている山林に焦点をあて, 「共同山」と言った場合, これを指すものとする。

2. 研究方法

(1) 対象地概要

研究対象地域は, 兵庫県山間部の中でも, 天役が現在も行われており, さらに予備調査によって, 天役の活動の場が環境維持活動のみならず, 集落活性化の活動でも行われていることが明らかとなった宍粟市一宮町東河内中坪集落とした。

図-1 に示すように, 現在の中坪集落は, 針葉樹林を主とする山林に囲まれており, 集落の南側を中坪川が流れている。昭和 36 年の土地利用図¹¹⁾では集落周辺の山林は広葉樹林及び草地が主であったことから, 周辺の山林は針葉樹林に変化してきたといえる。

*東大阪市 **大阪府立大学大学院生命環境科学研究科

図-1 中坪集落概要図

集落の世帯数は、昭和30年には48世帯であったが、現在は33世帯である。過疎化、高齢化が進む本集落では平成15年度に、兵庫県が募集した「ふるさとむら」事業にボランティア受け入れ地域として参加し、現在もふるさとむら活動として、そば栽培や山林の下刈等の活動が年に10回前後行われている。この活動は都市住民を「ふるさとむら会員」として受け入れ、集落住民と農作業や環境管理活動等を共にし、農村の活性化を図ることを目的としている。中坪集落のふるさと村会員は現在11名である。また同じ年、中坪集落内の一部広葉樹林で、県の助成を受け里山整備が行われることとなり、平成17年度に「ふるさと公園」が完成した。さらに、そのふるさと公園内には旧一宮町が町単独事業で行った「21世紀iのまち創造事業」の助成金を利用し、集落住民で作った炭焼窯もある。この炭焼窯を用いた炭焼体験も、ふるさとむら活動の中で行われている。

近年では外部団体であるNPO 樹恩ネットワークも、中坪集落を拠点の1つとして活動している。この団体は、活動範囲を全国に広げており、中坪集落を拠点とするのは関西中国地域ブロックのメンバーである。中坪集落での活動内容は、50代～60代の中高年層を中心とした10名前後が主としてふるさと村活動に参加することに加え、年に1回学生会員や一般会員を対象に「森林の楽校」というイベントをふるさと公園をメインに開催している。このイベントでは下刈体験を始め、集落住民との交流の時間が設けられ、毎年50～60名が参加している。

(2) 天役の変遷

予備調査とし、平成18年11月に中坪集落住民に対してヒアリングを行った。天役の共通認識として述べられたのは、「地域の共同山及びその他集落環境の維持管理に関する労役」であった。特に、昭和30年代前半まで薪炭林や草場として利用された集落の共同山で、それ以降行われてきた造林活動に係わる労役といった認識が強かった。

また、一宮町史¹²⁾によると、「部落有林の経営については従来よりほとんど天役(強制的出役)をもって運営されていた(後略)」との記述に始まり、「新しく1人前の権利ができるまで、30年無条件で勤める。この間に利益の配当などあれば勤めた年数で率が決まる(後略)」といった天役のしきたりについても述べられている。現在の天役は自治会がとりしきっており、自治会の役員会(自治会長(1人)・副会長(1人)・会計(1人)・隣保長(3人)の計6人の参加)で、天役の作業内容や作業日、作業場所が決定される。また、天役の従事者は作業内容にもよるが、集落の全世帯に対して各世帯から一人の出役を求めることが多い。その際、出られない世帯は労役の不足を補うという名目で現在は1世帯当

たり1万円の支払い(不足金と呼ばれる)を求められる。この仕組みは昔から続いているもので、金額は異なるが、少なくとも昭和初期には同様の仕組みがあったとのことであった。

(3) 調査及び解析方法

(i) 天役の変遷

天役の実態を経年的に探る資料として、自治会長のヒアリングにより、『部落入用帳』¹³⁾『中坪部落日記』¹⁴⁾『中坪部落事業実施報告書』¹⁵⁾『役員会議事録』¹⁶⁾を得た。これらから、「天役」の実施内容が明確となる年代は、昭和32～33年、昭和46年～48年、平成元年及び6年度、平成16～18年度であった。そのため、本研究における天役の調査対象年代は以上の4時代とした。これらの年代は林業の側面から見たとき、表-1に示すように、それぞれ、拡大造林推進期の前期、後期、森林整備の多様化・流域林業推進期、環境と公益的機能への傾斜期にあたると考えられる¹⁷⁾。

また、集落の共同山における植林木数を記した台帳¹⁸⁾からは、中坪集落でも社会的な林業の変遷と同様に、植林木数の増減が推移しており、昭和40年代に造林活動が最も盛んだったと考えられる。また、資料¹⁹⁾よりこの時代に中坪集落で生産された樹木が電柱材として外部へ供給していたことがわかっている。さらに、森林施業図²⁰⁾、²¹⁾より、それら針葉樹林の林齢に着目すると、昭和45年度には1～10年生の樹林が全体の38.7%と最も多かったのに対し、平成15年度には21～30年生が47%と最も多く、次いで31～40年生が30%と多くなっている。このことから、周辺の針葉樹林が年々高齢化していることがわかる。

これらのことを踏まえ、得られた資料より、4時代の天役における実施日・作業内容・実施場所を抽出した。表-2にその結果を示す。次にそれら天役の作業内容を、山林作業(造林事業に伴う作業)、環境整備(集落環境を維持するための作業)、ふるさと村活動(都市住民との交流の中で行う地域環境整備作業)の3種に分類して整理した。その結果を表-3に示す。そしてそれらの構成割合を比較し、天役がどのように変化してきたかを把握した。

表-1 天役調査対象年代における社会的背景

	森林政策の変遷	中坪集落を取り巻く社会的状況の変遷	得られた資料の年代
大正10年		部落有林野の整理統一(一宮町)	『中坪部落会計簿』(大正10年度～14年度)
昭和20年	▲戦後荒廃森林の復旧期(昭和20～30年)		『会計報告』(昭和28年度)
昭和30年	▲拡大造林推進期(昭和31～47年)		『記録 中坪部落』(昭和32～33年度)
昭和40年	▲東河内生産森林組合設立(昭和46年、東河内)		『中坪部落日記帳』(昭和46～47年度)
昭和50年	▲保育重視と集団化・計画化・組織化と推進期(昭和48年～62年)		『中坪部落天役出役簿』(昭和52～56年度)
昭和60年	▲森林整備の多様化・流域林業推進期(昭和62～平成8年)		『中坪部落事業報告書』(平成元年及び5年度)
平成元年			『中坪部落役員会議事録』(平成16～17年度)
平成10年	▲環境と公益的機能への傾斜期(平成9年～)	「森のゼロエミッション整備実施計画」策定(平成11年、一宮町) iのまち創造事業開始(平成12～15年、一宮町) ふるさと村活動開始(平成15年、中坪) NPO団体樹恩の受け入れ開始(平成18年、中坪)	『中坪部落事業報告書』(平成18年度)
平成20年			

(ii) 住民の天役に対する認識の変化

中坪集落全世帯(33世帯)に対して、天役への参加率・参加目的・今後の天役の必要度に関するアンケート調査を行った。天役の参加率については、天役の作業を《山林作業》、《環境整備》、《ふるさと村活動(現在においてのみ)》に分類して調査した。図-2に、天役従事者の世代別構成割合を、図-3に住民の天役参加率の調査結果を示す。

参加目的については、〔集落内環境の維持〕・〔経済的理由〕・〔集落内コミュニケーション維持〕に係わる質問項目を設定し、

表－2 各年代の天役における抽出結果

昭和32～33年度	32年度	2/9(下刈-大畑小丸), 2/17(下刈-大畑小丸), 3/10(下刈-虫畑・倉立・マカリ等; 植込-引別トウ・ヒツツ休等), 3/21(彼岸中日道路愛護-集落内道路), 4/5(山焼き-放牧場・乗岡), 7/21(下刈), 8/3(下刈-ヲニヲ日城山), 9/24(彼岸中日道路愛護-集落内道路)
	33年度	3/21(彼岸中日道路愛護-集落内道路; 補植-倉立・曲り・引別トウ等), 3/28(山焼き-放牧場・乗岡), 4/5(植込-松咲の空), 7/14(下刈), 8/18(下刈-マサコ・ヲニヲ・虫畑), 9/24(彼岸中日道路愛護-集落内道路)
昭和46～47年度	46年度	2/21(枝打-出石青年山小日城), 3/20(植込-倉立入口), 4/2(植込-黒井・咲野), 7/4(下刈-倉立カヤ場・舟橋の跡・曲り・松原切跡), 7/11(下刈-下桃浦より虫畑本谷全部), 7/12(下刈-小橋・尻梨・からす口・大橋), 7/25(下刈-僧都), 7/26(下刈-大橋), 8/17(簡易舗装の準備-集落内道路), 9/12(下刈-黄谷・尻梨・からす口・倉立・桑畑), 11/14(手入実施-僧都)
	47年度	1/14(下刈-手入-黄ヶ畑・尻梨), 1/15(植込-手入・地捨え-黄ヶ畑・焼野・尻梨柴とり跡), 2/20(地捨え-出石消防5歩植・石垣の手前放牧場), 4/10(植込-出石消防切跡・放牧新口・尻梨柴跡新口・栗から), 7/8(下刈-舟橋の切跡分・倉立カヤ場・曲り・倉立), 7/9(下刈-黄谷・金山・尻梨), 7/16(下刈-黄ヶ畑・中畑・松原・大橋), 7/25(下刈-僧都), 7/26(下刈-乗岡大橋), 8/6(簡易舗装準備-集落内道路), 9/3(下刈-黄谷・尻梨・松原・杉の越入口道上赤崩れ口まで・細越から虫畑本谷), 11/10(枝打-僧都)
平成5年度及び	元年度	3/18(枝打-大畑), 7/8(下刈), 10/24(道刈り-出石林道), 11/18(枝打-大畑), 11/25(枝打-中山)
	5年度	3/7(枝打-おわし), 3/14(枝打-杉の崎), 3/20(枝打-丸磯), 4/29(河川一斉清掃-河川・ユ・溝), 7/18(下刈-小谷), 11/23(枝打-長磯)
平成16～18年度	16年度	4/29(河川清掃・ユ堰-河川・ユ・溝), 5/22(花壇花植え-集落内花壇), 7/4(下刈-柿のなるうえ等), 7/25(炭焼準備・草刈除草-ふるさと公園・貸し農園), 9/19(台風の後片付け-集落内), 9/23(鹿柵設置準備-集落周縁部), 10/31(そば取り入れ-貸し農園), 11/21(除間伐・鹿柵直し-岡崎清吉氏椎茸農園等), 11/28(枝打・除間伐-政古・赤崩れ), 12/19(花壇花植え-集落内花壇)
	17年度	4/29(河川清掃・ユ堰-河川・ユ・溝), 5/8(さつまいも植え-貸し農園), 6/5(ふるさと公園オープニング準備-ふるさと公園・公民館), 6/12(ふるさと公園オープニング準備-ふるさと公園・公民館), 7/10(河川木伐採-中坪川沿い), 11/20(間伐・鹿柵直し-樅ヶ段・焼山谷・集落周縁部)
	18年度	4/29(河川清掃・ユ堰-河川・ユ・溝), 6/4(間伐・マサコ横・上岡), 6/18(下刈-ふるさと公園), 7/16(間伐・炭焼窯の修理-長磯・上の岡・ふるさと公園), 11/23(鹿柵補強-集落周縁部), 11/26(間伐・横枕跡・黄ヶ畑), 12/3(鹿柵補強-集落周縁部)

※表記の仕方：天役の実施日(実施内容-実施場所)

表－3 各年代における天役作業の構成割合

作業内容		昭和32～33年度		昭和46～47年度		平成元年度及び5年度		平成16～18年度	
		作業日数 [日]	計(割合) [%]	作業日数 [日]	計(割合) [%]	作業日数 [日]	計(割合) [%]	作業日数 [日]	計(割合) [%]
山林作業	地捨え	—	—	1.34	—	—	—	—	—
	植込み	2	—	3.33	—	—	—	—	—
	下刈	6.5	8.5 (61)	12.5	21 (91)	2	9 (82)	1	5.5 (24)
	枝打ち	—	—	2	—	7	—	0.5	—
	間伐	—	—	—	—	—	—	4	—
環境整備	手入	—	—	1.83	—	—	—	—	—
	山焼き	2	—	—	—	—	—	—	—
	道路愛護	3.5	—	—	—	—	—	—	—
	簡易舗装の準備	—	—	2	—	—	—	—	—
	道刈り	—	—	—	—	1	—	—	—
	河川清掃	—	5.5 (39)	—	2 (9)	1	2 (18)	3	9 (39)
	河川木伐採	—	—	—	—	—	—	1	—
ふるさと村活動	鹿柵設置準備・鹿柵補強作業	—	—	—	—	—	—	4	—
	台風等災害時の片付け	—	—	—	—	—	—	1	—
	花植つけ	—	—	—	—	—	—	2	—
	炭焼き準備	—	—	—	—	—	—	1	—
	農作業	—	—	—	—	—	—	2.5	8.5 (37)
合計		14	14 (100)	23	23 (100)	11	11 (100)	23	23 (100)
年平均回数 [日/年]		7	—	11.5	—	5.5	—	7.7	—

昔(昭和40年代)及び現在(平成16年度以降)において調査した。図－4に結果を示す。ここでは, “非常に重視していた”, “やや重要視していた”, “あまり重要視していなかった”, “全く重要視しなかった” という4段階の回答にそれぞれ4～1点の評点を与え, 各作業での平均値を出し, 標準誤差を求めた。

今後の天役の必要度では, 現在天役で行われている《山林作業》《環境整備》《ふるさと村活動》の3種類の作業について, それぞれの必要度をどのように考えているか調査した。結果を図－5に示す。左図は各作業に対する必要度を, “非常に必要である” から “全く必要ない” までの4段階の回答を用いて調査した結果を示している。右図は, 天役に代わる代替方策を, 天役以外の方策が良いと思う場合にのみ選択してもらい, その選択率を示している。また, 自由回答欄も設け, 意見を求めた。表－4にその結果を示す。

アンケート調査は各戸に直接配布し, 集落の集会の際に回収してまわった。得られた回答数は33件であり, 回答者はすべて男性で, そのうち50歳以上の割合が88%を占めていた。

3. 結果と考察

(1) 天役の変遷

表－3に示すように, 昭和30年代では, 山林作業が全作業日数(7日/年)の61%を占め, 残りは山焼きや道路愛護といった生活資源を調達する場の環境整備であったことがわかった。昭和46～47年度では, 調査年代中最も天役頻度が高く(11.5日/年), その作業内容では山林作業の割合が91%と多く, 残りは簡易舗装の準備など環境整備であった。平成に入ると天役回数はその約半分(5.5日/年)になり, 山林作業の割合(82%)も減少した。さらに山林作業の主となる作業内容はそれまでの植込み・下刈から枝打ち・間伐へと変化した。平成16～18年度には, 山林作業の割合は減少し(24%), 環境整備(39%)の他に, ふるさと村活動(37%)も天役に加わった。

以上のような, 天役における山林作業割合の増減は, 中坪集落共同山における針葉樹植林木数の増減からもわかるように, 昭和30年代以降の高度経済成長期における木材需要の高まりと, 昭和50年代頃からの木材価格の低迷によるものだと考えられる。また, 中坪集落に限って見ると, 集落外へ主として供給していた電柱材の需要がなくなり, 良質材の供給を目指す体制へと変化したためだと考えられる¹⁹⁾。また, 山林作業だけでなく割合の増減の少ない環境整備や新たに加わったふるさと村活動など, 天役の内容が社会的背景と共に変化してきていることが明らかとなった。

(2) 住民の天役に対する認識変化及び今後の展望

(i) 天役従事者の世代別構成割合及び天役参加率の変化

図－2に示すように, 天役の主となる従事者は, 昔は40～50代を中心とした多様な年齢層の人が従事していたのに対し, 現在は50代が全体の55%を占め, 次いで多いのが60歳代の28%と, 昔と比較して従事者の高齢化が顕著であることがわかる。

また, 図－3に示すように天役参加率は, “山林作業” “環境整備” について, 両時代共に “全て参加した” “ほとんど参加した” の合計割合が80%以上と高かったことが分かった。しかしながら細かく見ると, “参加した” の割合が, 山林作業では15%, 環境整備では8%, 昔と比較して減少している。また, ふるさと村活動については, “全て参加した” の割合が17%であり, 他の2種の作業よりもさらに参加率は低いと考えられる。

以上のことから, 全体的に見ると, 天役の参加率は低下してきていると考えられる。特に, 危険を伴う作業である山林作業で減少幅が大きく, 比較的体力や技術を要しない作業である環境整備に関しては小さいといった, 作業内容による変化の違があると考えられる。また, 現在の山林作業及び環境整備の参加率以上に

ふるさと村活動の参加率が低いのは、住民意識の中で、他の2種と比較して、必要不可欠な作業であるという位置づけがあまりなされておらず、ふるさと村活動に対する参加への義務感が薄いためだと考えられる。

図-2 天役従事者の年齢構成割合

図-3 天役参加率

(ii) 天役に参加する目的の変化

図-4に示すように、天役に参加する目的は、昔は「集落の財源を得るため」(評点3.39)、「集落内の規律を守るため」(3.26)、「生活や生業の中で必要不可欠な作業であったため」(3.15)といった項目が重要視されており、現在では「集落内の規律を守るため」(評点3.07)や「伝統的な文化(祭、年中行事など)を守るため」(3.07)、「住民同士のコミュニケーションの維持のため」(3.00)といった項目が重要視されていたことが分かった。また、昔と現在とで有意な差が見られたのは「生活や生業の中で必要不可欠な作業であったため」、「集落の財源を得るため」、「野生の動植物の生息環境を守るため」であり、前の2項目に関しては昔の方が、後者に関しては現在の方が、重要視している度合いが高かった。以上より、天役に参加する目的は、「集落で生きていくため」から、「集落内のコミュニティを維持し、より良い環境を造るため」に変化していると考えられる。

(iii) 今後の天役のあり方についての意向

図-5に示すように、各作業の今後の必要度について山林作業を見ると、枝打ち、間伐などの針葉樹人工林の管理作業では必要であるといった意見が90%以上と多いのに対し、地植えや植込みといった新規の植林作業では、60%前後と少なくなっていることが分かる。また、環境整備ではどの項目についても、「必要である」という回答が90%以上と高く、「非常に重要である」という回答も、他の作業と比較して回答率が高いことが分かる。これに対し、ふるさと村活動では「必要である」という意見が4つの項目で80%以下と他の作業と比較して少ないが、「ふるさと公園の下刈」では94%と高いことが分かる。

次に、代替方策の図では、天役作業としての必要度が高い環境整備を除く作業を見ると、傾向として、特に技術や体力を要し、危険を伴う作業である山林作業では、間伐や枝打ちを中心に「業者に依頼」と「有志(無償)で行う」の選択率が高く、地域活性化活動の一環であるふるさと村活動では、「有志が無償で行う」「ボランティアに依頼」の選択率が多いことが分かる。

このように、既存の針葉樹人工林及びふるさと公園の管理作業

図-4 天役に参加する目的

や、環境整備に関しては、今後も天役で行うべきだという意見が多いことがわかった。また、天役に代わる代替方策として、山林作業では、業者に依頼する、有志(無償)で行うといった方策が多く挙げられた。業者に依頼するという回答は、危険が伴うことや体力的な面から考えた場合の結果であり、有志(無償)で行うという回答は、従来自分達で管理してきた山林に関しては自分達で維持管理していきたいという思いと、現実的に、代替方策をとることで費用がかかることを懸念したために得られた回答ではないかと考えられる。そのため、「有志(無償)」と「業者への委託」の選択率が同様に高くなったと考えられる。

次に、ふるさと村活動では、集落内の有志(無償)やボランティアに依頼するといった方策が多く挙げられた。以上のことから、今後も最低限環境を維持するための作業は天役で行う意向があるが、集落活性化のための作業や危険を伴う作業に関しては代替方策に拠るという意向もあることが伺えた。

(iv) 自由回答

表-4に示すように、経済的な山林価値の低下や少子高齢化、山林利用形態の変化や労働環境の変化などの社会的変容の中で、住民が天役に対して様々な課題を認識していることが分かった。「最近では不足金を払って作業はしないという人が増えてきている様だ」という意見からは個々の価値観の変化が指摘されており、「少子高齢化、後継者不足により人材の確保が難しい」という意見からは担い手不足や、それに伴う技術伝達の不足による安全性の問題が指摘されている。さらに、「年金生活者で何回も不足金を支払うのは困難」という意見からは体力的に天役に出ることが難しい高齢者が、高額な不足金を求められ、重い負担となっていることが指摘されている。また、今後の天役については、「減らしたい」という意見や「そのとき必要な事業に対する天役は維持すべき」という意見が出され、集落住民の個々の考え方が大きく異なっていることが伺えた。

4. まとめ

以上のことから、天役は時代とともにその役割が変化してきていることがわかった。

昭和30年代は、今後需要が増すと見込まれた造林事業の拡大が徐々に始められた時期であったが、特徴的な天役作業として、山焼きや道路愛護など、生活資源を得る場である山林環境の維持や生活道路の維持のために、天役が行われた時期であった。つまり、住民にとって天役は「生きていくために必要な環境を維持するため」の労働であり、出ることがごく当たり前であった。意識調査からも昔の天役では、天役にすることは、生きるために必要不可欠なことであり、参加することがごく自然なことであったと

図-5 今後の「天役」各作業の必要度（左図）及び代替方策の選択度（右図）

考えられる。昭和40年代に入り、高度経済成長期に差し掛かると、エネルギー資源は薪炭から石油へと変化し、天役から山焼きがなくなった。またこの時代は造林拡大が顕著になった時代であり、昭和46年～昭和47年度に行われた天役作業のうち、91%が植込みや下刈といった山林作業であったことから、その様子が伺える。また、住民の意識調査から、昭和40年代の天役では、“造林事業によって得られる収益を目的とした作業”といった見方が強かったと考えられる。

しかし昭和50年代後半より、社会的な木材需要の低迷によって、天役における山林作業も変化していったと考えられる。平成元年及び5年度には、山林作業が全体の82%と多くを占めているが、その内容は昭和40年代とは異なり、枝打ちが主となっている。このことから、新規の造林活動はほとんどなされなくなり、それまでに植林された樹木の保育及び管理が中心となっていることがわかる。

このように山林作業を中心に続けられてきた天役であるが、平

成15年に始まった“ふるさと村活動”により、それ以降の天役にはふるさと村活動に関する作業が加わることとなり、平成16年度からは、NPO樹恩ネットワークも受け入れている。平成16年以降の天役では、ふるさと村活動が山林作業と同程度の頻度で行われている。この背景には、集落全体の過疎化・高齢化を危惧する住民の意識があると考えられる。住民に対する意識調査からも、現在の天役は、“集落内のコミュニティ及び集落環境を維持し、よりよくするための作業”といった見方が強くなってきていることがわかっており、集落環境の維持・管理において都市住民との交流の中で地域の活性化を目指そうとする意識が高まってきていると考えられる。以上のことから、天役は社会的変化に伴う地域住民の生活や地域環境の変化と密接に関係しながら、変化してきたことがわかった。中でも天役が本来有していた「義務」や「環境維持」、「共同」といった性格が、現在の地域活性化の施策においても同様に継承されていることは注目すべき点である。

しかし、意識調査の自由回答では、現在の天役の仕組みには、担い手不足や不足金の高さ、高齢者への負担増など様々な課題が生じていることがわかった。また、天役を減らしたいという意見がある一方で、今後はふるさと村活動を重要視していくべきだとの意見があるなど、住民の考え方も様々である。これまで、住民の考え方や社会的背景、環境は、時代と共に変化してきたが、天役のしくみそのものの形をあまり変えてこなかった。意識調査の結果からも伺えるように、今後の天役においては、その作業内容及び集落住民の年齢構成等を踏まえ、体力及び技術を要し、危険が伴う山林作業については業者に依頼し、比較的簡単な作業である環境整備については天役で行い、ふるさと村活動では、ボランティアに依頼するといったように、天役で行うべきものと、業者やボランティアに依頼するなどの代替方策によるものとを分別する必要があると考えられる。具体的に中坪集落においては、山林作業を依頼する業者については一宮町森林組合が、ふるさと村活動を依頼するボランティアについては前述したふるさと村会員やNPO樹恩ネットワークなどが考えられる。しかし、その際に発生する支出等を考慮し、不足金を踏まえた、天役のしくみをどう組み直すのか、住民全体で考えなければならない。また、技術的な側面を考慮する必要があるが、NPO団体やふるさと村会員等ボランティアをも巻き込んだ対話ができれば、外部団体との交流の中で集落の環境整備や山林環境の整備における技術的な伝承や担い手不足の解消も可能となるのではと考えられる。

表-4 自由回答結果

①天役に係る社会的変容について
・山林の値打ちが下がり、山林を所有していても、価値もなく売ることもできない。
・山林の利用度も少なくなった
・天役は年をとると出にくい、家族にも強要できず、出るだけは出ている。
・高齢化、1人暮らしのため、天役に出るのが難しい。
②個々の価値観の多様化について
・生産森林組合も、森林収益が上がらないため、かえって不足金が多いほうが良いのでは、という風潮がある。
・最近では不足金を持って作業はしないという人が増えてきている様だ。
・最終目的である森林の保全管理の意識が徐々に薄れてきている現象を懸念している。
・若者にたまの休みに天役では若者の定着率が悪くなる。
③担い手不足とそれに係わる課題について
・少子高齢化で担い手不足
・少子高齢化、後継者不足により人材の確保が難しい。
・現在の労働力は年齢に不足している。
・山林については時代の移り変わりにより怪我のことが心配。
・ふるさと村活動については役員さんに負担がないか心配である。
④不足金について
・年金生活者で何回も不足金を支払うのは困難。
・2～4時間でも10000円/日という不足金の高さは問題である。
・不足金は大変だが部落の財政を考えると必要。
⑤天役の作業内容について
・今度天役は農地、山林のものだけで良い。
・これからは中坪自治会はあまり山林天役を重視しなくても良いのではないかな？
・山林を放っておくのでは荒れるばかりなので維持するためには天役による下刈枝打ちなどはこれからも必要。
・これからはふるさと村活動を重視すべきでは？
・事によって天役は必要。
・天役は部落内環境全体を守る重要な事業であるため、どのような変化が起こるか分からないが、そのとき必要な事業に対する天役は維持すべき。
・これ以上天役は増やしたくない。減らしたい。

5. おわりに

以上のように、天役のもつ課題とその対策、今後のあり方に関して考察したが、今後の社会的情勢を踏まえ中山間地域での集落の維持には、天役のような共同の仕組みがなくてはならないものであると考えられる。しかしながら、変化していく時代の中で今集落にとって何が必要か、どのようなしくみで天役を運営すべきかを常に考えて、臨機応変に再編成していく必要があると考えられる。その上で、行政やNPO団体、ふるさとむら会員等をも巻き込んだ対話をしていくことが非常に重要となる。まとめでも述べたように、労力の確保や技術伝達の面、様々な価値観が触れ合う場として、NPO等ボランティアを交えた集落活性化活動に、住民にとって義務の側面をもつ集落管理活動を取り込むのは今後の集落環境の維持において大きな可能性をもつと考えられる。特に、都市住民等のボランティア活動と天役という共同管理活動とを協働で行うことで、天役で問題となっている担い手不足の解消や集落住民がもつ環境管理技術の伝承が、行えるのではないかとといった視点から、今後も集落内での活動をより詳細に調査していく必要があると考えられる。

また、天役のような集落共同管理活動は各地の農村集落で行われているが、少なからずそれぞれの集落で特徴があると考えられる。それらは、地域の環境特性や歴史、文化、社会的背景など、様々な要因によるものであると考えられるが、中坪集落のように、集落住民全戸の同意を得て集落活性化の活動においても天役のような義務の側面をもつ共同管理活動が行われることは非常にまれであると考えられる。また、今後も持続的にこの活動が行われていくのか、さらにNPO等ボランティアの技術力ではどの程度の活動まで行えるのかなどの様々な検討課題がある。

今後は、中坪集落でどのようにして集落全戸の同意を得るに至ったか、またその背景にある社会的変化や、集落を取り巻く行政及びNPO等諸団体の取組みなどを調査し、様々な集落においても適応できるような仕組みを構築することが必要だと考えられる。

謝辞：本研究を進めるにあたり、兵庫県宍粟市中坪集落の皆さまには大変お世話になった。古い資料を提供してくださり、聞き取り調査やアンケート調査にも快く応じてくださるなど、多大なご協力をいただいた。心より感謝の意を表したい。

補注と参考文献

- 1) 堀内美緒・深町加津枝・奥敬一・森本幸裕(2004)：滋賀県志賀町の2集落を事例とした1930年ごろのランドスケープの空間構造と管理：ランドスケープ研究 67(5), 673-678
- 2) 武内和彦(1991)：地域の生態学：朝倉書店

- 3) デイビッドスブレイグ・後藤敏寛・守山弘(2000)：迅速側図のGIS解析による明治初期の農村土地利用の分析：ランドスケープ研究 63(5), 771-774
- 4) 安井暁世(2005)：中山間地域における文化景観の変遷：ランドスケープ研究 68(4), 330-338
- 5) 黒田乃生(2002)：白川村萩町の森林における利用と景観の変容に関する研究：ランドスケープ研究 65(5), 659-664
- 6) 堀内美緒・深町加津枝・奥敬一・森本幸裕(2006)：明治後期の日記にみる滋賀県西部の里山ランドスケープにおける山林資源利用のパターン：ランドスケープ研究 69(5), 705-710
- 7) 堀内美緒・深町加津枝・奥敬一・森本幸裕(2007)：明治後期から大正期の滋賀県西部の里山ランドスケープにおける山林資源利用の変化：ランドスケープ研究 70(5), 563-568
- 8) 小池修・田村孝造：農業水路の維持管理実態と住民参加拡大の可能性－宮城県内の2集落を対象として(2005)：環境情報科学論文集 19, 193-198
- 9) 上原三知・重松敏則・朝廣和夫(2003)：都市近郊農村における里山林の管理・利用実態とその公益的機能に関する研究：ランドスケープ研究 66(5), 573-578
- 10) 宮崎猛：環境保全と交流の地域づくり(2000)：昭和堂, 76-82
- 11) 5万分の1土地利用図(昭和36年)：兵庫県発行
- 12) 一宮町史(1985)：一宮町史編集委員会
- 13) 部落入用帳(1956～1957年)：総代T氏
- 14) 昭和45年度中坪部落日記・中坪部落日記帳昭和47年度(1970～1972)：総代T氏
- 15) 中坪部落事業実施報告書(平成元年及び平成5年度)：総代K氏
- 16) 平成16～18年度役員会議事録：自治会長Y氏
- 17) 堺正紘著(2004)：森林政策学
- 18) 五分植台帳(1930～1976)：中坪集落
- 19) 第30回農林水産祭参加 全国林業経営推奨行事 選ばれた林業経営(1991)：社団法人大日本山林会刊行, 79-82
- 20) 昭和45年度作成森林簿(1970)：東河内生産森林組合(中坪集落)
- 21) 平成15年度作成森林施業計画(2003)：中坪集落

注1) 一宮町史¹²⁾によると、宍粟郡で大正6, 7年から行われた山林の整理統一の際に部落に一戸を構え、本村の負担を分担し、かつその部落有財産を共同利用する権利を有する者とされている。